

I 目的

高校において、短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」(以下、短時間プログラム)を組織的に取り組むことが、生徒の人間関係をつくる力を育成するために有効かを検証する。また、組織的・継続的に実施する上での効果的な取組や課題を明確にする。

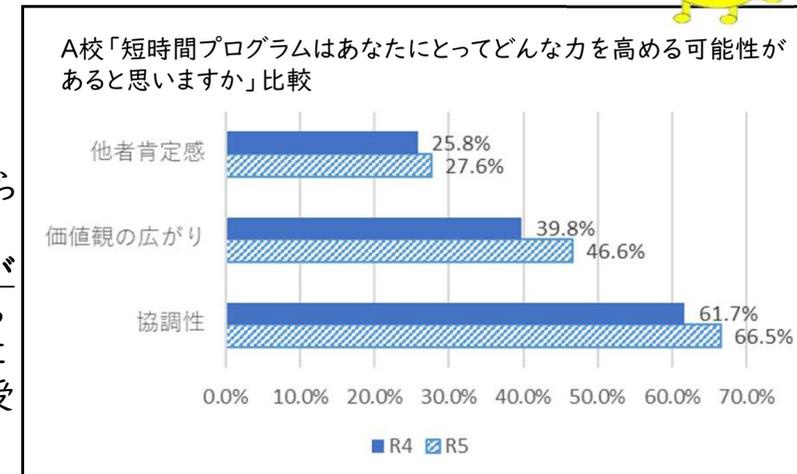
II 内容

県立高校2校において、年度当初に目的や流れ、年間実施計画等を確認し、統一した流れで、組織的・継続的に短時間プログラムを取り組んだ。年度を跨いで「生徒と教師の意識変化に関するアンケート」を行い、その効果を検証した。



III 成果

- 生徒のアンケート結果分析では、経年変化を見ても、一環して好意的に短時間プログラムを受けとめており、クラスの居場所づくりにより影響を感じるだけでなく、各授業においてもよい影響を感じていることがわかった。授業のどの場面でよい影響を与えたのかの質問に対して、R4年度は「ペアまたはグループワーク」が67%と最も多かったが、R5年度では「質疑応答」までも47%から61%まで大きく伸びた。
- 実践校2校(A校:3年間、B校:2年間)でアンケートの比較をすると、継続することで2校間の差がなくなり、全ての項目が肯定的な評価に向上した。継続して実践することによる確かな効果が見られた。3年間継続して短時間プログラムを行ったA校では「協調性(自分とは異なる環境や立場にいる人と、協力しながら物事を進めていく力)」「価値観の広がり(自分以外の人からのアドバイスを受け入れたり、新しい考えを取り入れたりする力)」「他者肯定感(相手のありのままを認める感覚力)」を高める可能性がある」と答えた割合が、右の表のように上昇した。



IV 課題

高校において、短時間プログラムを継続的に取り組むことで、生徒は他者理解がすすみ、クラス内の居場所づくりや授業への良い影響等、有用性を感じているが、一方で教職員は生徒に比べると有用性を感じている割合が少ない。また、少数ではあるが、短時間プログラムの実施を否定的に捉えている生徒もいる。

否定的な評価をする生徒個人の状況把握と対応

その生徒のプログラムへの参加の様子はどうであったか、どのような困りがあったかなど、個人の状況をアセスメントして、無理強いするのではなく、参加方法を工夫する必要がある。

教職員の長期的な成果への理解

短時間プログラムを継続的に行うことによる生徒の長期的な成果についての理解がまだ十分に進んでいない。短時間プログラムは「対話の練習」と捉えられがちであるが、「それぞれの視点や価値観のやりとりの仕方を学ぶ」場であり、「人間関係づくり」につながる。そのことを教職員が認識して組織的に取り組むことができるよう、有用性を感じている生徒の声や具体的な効果等を研修で発信していく必要がある。